

岡山県における手指・手部切断者に対する作業療法の現状について On the Current Condition of Occupational Therapy for finger and partial hand amputation in Okayama

○小林伸江 (OT)^{1,2,3)}, 妹尾勝利 (OT)⁴⁾, 井上桂子 (OT)⁴⁾

¹⁾川崎医療福祉大学大学院医療技術学研究科リハビリテーション学専攻修士課程, ²⁾専門学校川崎リハビリテーション学院作業療法学科, ³⁾川崎医科大学附属病院リハビリテーションセンター, ⁴⁾川崎医療福祉大学医療技術学部リハビリテーション学科

Key words: 手指, 切断, 義手

【序論】

上肢切断の原因は、労働災害をはじめとした外傷によるものが多い（中島咲哉，1997）。全国の義手作製件数の75%は手指・手部義手であった（高嶋孝倫，1996）。一般的に、手指・手部切断の多くは残存指に損傷がなければ作業療法（以下、OT）は非介入であり、前腕・上腕切断のように早期義肢装着法が確立されていない現状にある。しかし近年、手指切断に対するパッシブハンドの報告（池田紗綾香，2012）から、能動性を持たない装飾用義手であってもADLに使用できる可能性があり、日本で多いとされる手指・手部切断者に対しても、早期からのアプローチが重要ではないかと考えた。

【目的】

岡山県における手指・手部切断者に対するOTの実状や義肢装具士（以下、PO）の関わり方をアンケート調査し、OTの可能性を考察することであった。

【方法】

岡山県の身体障害者領域のOT、主たる義肢装具作製施設のPOを対象に、87施設にアンケートを郵送した。アンケートは無記名で行い、返信をもって同意とみなした。質問内容は、経験年数、義肢装着前訓練に関わった経験の有無、練習用仮義手の作製経験の有無、本義手の作製に関わった経験の有無、義手の役割であった。結果は記述統計で分析を行った。なお、本研究は大学の倫理審査委員会の承認を得ている。

【結果】回収率はOT50.6%、PO100%、回答者数はOT270名、PO5名、経験年数はOT8.5年（±25.5）、PO19.2年（±26.2）であった。義肢装着前訓練の経験はOT25名（9.3%）、PO0名、練習用仮義手の作製経験はOT5名（1.9%）、PO1名（20.0%）、本義手作製に関わった経験はOT9名（3.3%）、PO5名（100%）であった。義手の役割はOT130名（48.1%）、PO5名（100%）が記載した。OT複数名で自由記載の中から75の文言を拾い、13のカテゴリーに分類し、集計した。結果は外観の改善が最も多く、OT69名（25.6%）、PO5名（100%）、次いで手の機能改善がOT61名（16.7%）、PO2名（40.0%）、ADL改善がOT50名（13.5%）、PO2名（40.0%）、心理的安定がOT27名（10.0%）、PO1名（20.0%）だった。OTのみ回答があったのがQOLの向上27名（10.0%）、切断肢の使用促進25名（9.3%）、幻肢痛の予防・改善13名（4.8%）、社会参加促進12名（4.4%）、断端成熟促進5名（1.9%）、廃用・変形予防3名（1.1%）であった。

【考察】

義手の役割ではOT・POともに外観の改善が最も多く、遠位部の切断に対して装飾用義手が作製される目的が広く認知されていると考える。次いで機能的役割を示唆する回答が多く、OTにおいては切断後の二次的合併症に対する役割を挙げるものが多かった。しかし、自由回答は様々あったが、実際に練習用仮義手を作製した経験や、OTが本義手作製に関わった経験は少なかったことから、手指・手部切断において本義手作製に直行する流れが一般的であり、OTが介入することは稀であると考えられる。これは、装飾用義手が機能性を持たないとの認識から治療用装具とは認められず、症状が固定した後に更生用装具として作製されるからと考える。しかし、日本における上肢切断のうち手指・手部切断の割合は多く、OTは作製する装飾用義手の役割や有効性・個別性を再評価する必要があると考える。